

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

ホネの黙殺と少年少女殺人事件

—自己肯定感を考える その1—

1 ある手記

「僕の人生で本当のことを言えるのは、これから何度あるだろうか……」

これは、ある中学生が記した卒業文集の書き出しである。僕で始まるこの文の作者を、女性と思った人はいないだろう。この作者A子(当時16歳)は、長崎県内の進学高校へ入学した2014年の7月、中学の同級生を、一人暮らしをしていた部屋で惨殺、首と手首も切断した。冷蔵庫の中には、猫の生首も入っていたのだった。

一人の高校生の命が奪われ、一人の高校生が殺人犯に成り果てたこの事件。決して許されない犯行だが、殺人者A子は、自分が自分として生きられず、健全な自己肯定感を育むことができなかつた犠牲者ともいえるのだ。A子は常に、父親の意に沿う子どもになるように、いわば、自分とは違う別の人間になるよう、強いられた日々を送っていた。その一つの証が、この卒業文集での書き出しの「僕の～」だったのである。

2 生きる上で最も大切なもの

私たちが、生きていく上で最も大切なものは自己肯定感である。自分のあるがままの心と身体、そして今の在り様を、価値あるものとして認める。この基本的自己肯定感こそ、生きる原動力になる。

「自分は駄目だ」「何やっても無理」「存在価値はない」等という否定的な自己概念を持った者は、楽しく生きること、生き抜くことも難しい。それは、大人も子どもも変わらない。この自らが抱く自己概念が、肯定的に保たれているかどうかによって、私たちは、自らの言動はじめ、人間関係の広がり、迎えるキャリアから運命までもが、決定的な影響を受けるのだ。

3 理想的エリート家族に横たわっていた深い病理

A子の家は、周囲から理想の家族といわれていた。早大卒の父親は、長崎県内で最大規模といわれる法律事務所を構え、いずれ市長選にも出ると噂されていた敏腕弁護士。A子の学校のPTA会長もやり、スケートの国体選手としても有名だった。市の教育委員を務め、人格者といわれた母親は東大卒、兄は当時東京の有名私立大在学中だった。高台の豪邸に住み、何不自由なく暮らし成績優秀だったA子。だが、非の打ちどころのない裕福なエリート家族という輝かしい表の顔の裏には、深い家族病理が横たわっていたのである。

A子が小学生の頃、誰かに将来の夢を聞かれた時「お花屋!」と答えると、すかさず父親は「違うでしょ、お医

者さんでしょ」と訂正、母親は「家では好きな職業も言うてはいけないのよ」と、親しかったA子と同級生の母親に嘆いたという。妻が外出する際も「何のために、どこへ行くのか」と伝えてからでないと、外へも出られなかったとされる。すべて、父親が思い通りに管理する中で、A子の言動も父親が支配し、すべては彼の意向に沿うものが認められ、それ以外は排除される構造が、A子の家庭を貫いていたのだった。

このように自分のホネや個性や主体性を抑圧されている環境では、自己肯定感が育まれるのはきわめて難しい。「自分は自分でいいんだ」という最も大切な基本的自己肯定感が、A子の内面に根付かなかつたのも、容易に理解できよう。この積年されてきた病理は、よくできた母親が病死(2013年10月)した翌年、殺人事件として一挙に顕在化するのである。

支えだった母親を亡くし、傷心の日々を送るA子にかまわず、父親は20歳年下の若い女性と翌年5月に再婚する。「お母さんが亡くなってすぐお父さんが新しい女の人を連れてきた。お母さんのことはどうでもいいのかなあ」とA子は幼なじみにつぶやいたという。父親はまた、同年2月にA子の戸籍を移し、祖母の養子にし、戸籍上、A子と父親は親子でなくなる。この戸籍変更の翌月の3月、A子は夜中に金属バットで父親を襲い、頭に大けがを負わせている。父親は「スケートでころんだ」として入院し、翌月、「留学するための準備」という名目で、A子を近くのマンションに引っ越しさせているのだ。

父親は一事が万事、自分の体裁が最優先、A子の心に全く共感せず、心理的虐待ともいえる対応を繰り返していた。亡くなった母親も、「いつまでも子どもと向き合おうとしない旦那とは、やっていけない、早く別れたい」と、生前同級生の母親に吐露していたという。

4 少年少女のこころの叫び

このA子のケースに触れて、かつて酒鬼薔薇聖斗という、神戸の中学生だったB少年が起こした殺人事件(1997)を、思い出す人も多いだろう。B少年は長期間被っていた心理的虐待により行為障害を発症していた。A子も同様の障害に陥っていたのは間違いないであろう。

B少年が神戸新聞社へ送りつけた犯行声明、「もしボクが生まれたときからボクのままであれば……」「今までも、そして透明な存在であり続けるボクを、……」。これらと冒頭のA子の文面の中に共通した心理、すなわち圧倒的に低い自己肯定感が読み取れるだろう。それは、長い間、自分が自分として生きてこれなかつたこころの叫びでなくて、何であろうか～!